

山は姿勢を崩さず座っています。この日は、夕方から雪が舞い始めました。

⑦ お母さんは心配でたまらず、藤樹先生の部屋に行きました。



先生母「これ、与右衛門。外は雪が降り始めましたよ。あんなにまでしておられる方を、いつまで放っておくのですか。せめて、会って

おあげなさい。」

先生「まだ座っておられるのですか。お母さん、分かりました。では、この部屋で会いましょう。」

お母さんは、ほっとして蕃山を呼びに行きました。

先生母「熊沢さん、先生の部屋にお入りなさい。」

蕃山「そうですか。(はずんで言う)会っていたのですか。」

⑧ 部屋に通してもらった蕃山は、深々とおじぎをしました。

蕃山「私は備前藩をやめた後、一人で

学問を続けてきました。しかし一人では、解らないところが多くて困っていました。先生、私は学問を修めることができたら、再び備前に戻り、人々が貧しい暮らしや、洪水・干ばつ等の災害で苦しむことのない藩にしたいと考えています。そのために、先生のお力を借りたいのです。先生、私を弟子にしてください。」

先生「熊沢殿、あなたの学問への志がよく分かりました。私も長い間、一人で学問をしてきましたので、独学の苦労はよく分かります。また、あなたが真の学問を志しておられることを知り、うれしく思いました。学問への思いは私も同じです。共に力を合わせて学びを深めましょう。」



先生は、蕃山の手をしっかりと握りしめました。

蕃山は、先生の学問の内容を実際の生活の中で生かすことが大切ですね」

⑨ 先生は、蕃山の学び取る力が優れており、考え方も深いと感じました。そこで、蕃山がこれまで学んできた儒学を丁寧に教えるだけでなく、お互いの考え方を語り合うようにして、学問を深めました。

蕃山「先生、学問の内容を実際の生活の中で生かすことが大切ですね」

先生「そうですね。だれでも、心と行いを共に高めることで、学問は進みます。」

こうして、蕃山の学問は、ぐんぐん進みました。

ある日のことです。蕃山は先生にこんな話をしました。

蕃山「先生、学問が進みかけたばかりなのに、実は、家族を養うため桐原へ帰らなくてはなりません。しかし、先生に教えていただいたので、これからは一人でも学問は続けようと考えています。」



蕃山がわずか八ヶ月ばかりで桐原へ帰ることになったのは、父親が仕事を求めて江戸へ行き、働き手がいなくなった家族は、非常に貧しい暮らしになったからです。

先生「よく分かりました。家族を大切にしなければ。今のあなたなら、住まいが離れても学問はできますよ。」

蕃山「先生の門弟として、これからも励むつもりです。よろしくお願います。」

先生「解らないことができたなら、手紙をください。いつでもお力になりますよ。」

蕃山「先生に教えていただいたご恩は、一生忘れません。これからもよろしくお願いたします。」

⑩ (半分まで引く)

桐原に帰った蕃山は、家族の生活に驚きました。毎日、まずい「ゆりこぞうすい」ばかりです。親類や近所でもらったくず米に、雑草の種やぬかみそを混ぜて炊くのです。蕃山は苦しい生活を助けるため、家族とともに朝早くから畑仕事をしました。

蕃山「畑仕事はしんどいけれど、野菜作りは楽しいなあ。『腹いっぱい食べられる。』と、家族が喜んでくれるしな。今日もがんばろう。」

(ここで、全部引く)

蕃山は、畑仕事でくたくたになりま



したが、夜の勉強を楽しみにして頑張りました。先生からの手紙が届き、学問の進み具合や暮らしのことを心配してくれました。数年たったある日、先生から、陽明学の研究内容が書かれた本が届きました。

蕃山「ほう、先生が新しく研究を始めた本だ。とても解りやすい。そう、先日読んだ本で、解らないところがあつた。手紙を出して教えていただこう。」

こうして、蕃山の生活は貧しくても心は充実していました。藤樹先生の心配りのお陰で、門人としての生活が送れたのです。

蕃山「先生のお陰だ。こうして離れて勉強していても、学問が深まってきた。ありがたいことだ。」

蕃山は、次第に力をつけ、藤樹先生の学問や人としての生き方を、深く学びとりました。

⑪ (半分まで引く)

備前藩をやめた蕃山が、貧しい暮らしをしながら勉学に励んでいることを、家老に知らせた人がいました。

家老「殿様、七年ほど前まで殿様に仕えておりました『熊沢』のことを覚えておられますか。」

光政「覚えているとも。『強い侍になりたい』と言って、武術の修業に励